

## 専門高校における教育相談で高校生が望む教師の対応

筑波大学心理学系 佐藤 有耕

都城農業高等学校 堂領 洋

筑波大学心理学系 落合 良行

Teacher attitudes towards high-school student aspirations during career guidance at technical schools

Yuhkoh Satoh (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*), Hiroshi Doryo (*Miyakonojo Agricultural High School, 1-5-1 Iwayoshi Miyakonojo Miyazaki 885-0019, Japan*) and Yoshiyuki Ochiai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this study is to investigate appropriate teacher attitudes toward high-school students relating to career guidance at technical schools. A questionnaire, consisting of 60 items relating to the attitudes and characteristics of teachers who students regard as being helpful and who seem to be approachable, was administered to 1,208 high-school students at agriculture, engineering and commerce technical schools. Analysis of responses indicated that it is important for teachers to be warm and approachable when giving career guidance at high school. Teachers not only need to have sufficient knowledge and information, but must also be able to deal with students who are experiencing uncertainties regarding life choices.

**Key words:** teacher attitudes, career guidance, technical high schools

### 問 題

近年、高校生の就職の問題は、経済不況や時代背景の影響を受け、以前に増して難しくなっている(安田, 2003)。しかし、「フリーター」や「若年無業」の問題は、単に高校への求人が減ったからという理由だけではなく、従来の高校の進路指導が、卒業時点での就職斡旋を中心としていたせいであるとの指摘もある(小杉, 2003)。このような、いわば出口だけの進路指導がうまく機能していた時代も過去にはあった。その当時は、生徒は職業や自分のキャリア形成についてとくに考えずに就職することさえ可能であった。そのつけが今日現れているということである。さらに、就職先が見つからないからという理由で進学を選択する場合も見られるように

なり(安田, 2003)、就職でも進学でも、不本意な進路選択が起きやすい状況にある。

このような状況にあっては、進路選択を控えた高校生に対する学校からの援助は、ますます重要になっていると言えるであろう。しかし、定職に就く従来の就職からフリーターまでという選択範囲の広がり、進学率が高くなかった専門高校での進学率の上昇など、どの高校においても進路選択の幅は広がっている。したがって、「指導の側からすれば、それらの様々な進路選択を支援する必要性が生じてくる。さらに、複雑化という側面もあることを踏まえれば、その指導はより困難なものになっている」(浦上, 2003)のである。

本来の進路指導は、卒業時の就職斡旋や進学先の確保ではなく、広く生き方を考えさせることを中心

とするはずであろう。「自己を正しく投企し、独自の人生を選択する方法を教えるのが進路指導」(野尻・森, 1969)である。そこで高校生が何を考え、どの道を選択していくかのプロセスは一人一人異なり、きわめて個別的な課題である。したがって、進路という問題に高校生が立ち向かう上では、学校で教師と個別に相談することが有益な方法となる。その中で生徒は、自分の希望と現実、適性と可能性などを考えながら、生き方を考え進路を決定していくことになる。それを支援する教師の側には、幅広い進路情報を持つ者としての指導的な役割と共に、具体的に相談を聞く語り相手としての役割も必要になる。このような相談の機会を提供していくことは、「進路指導は、単に進路先の決定や進路選択上の問題解決に対する指導・援助にとどまらず、生徒の進路発達(職業的発達,あるいはキャリア発達ともいう)をより促進するための介入活動を含む」(佃, 1988)という立場からの実践と言えよう。

ところで、その機会を提供するためには、相談に行きたいという気持ちを生徒に持たせることが必要になる。教師の側から言うと、相談に行きたくなるような対応のできる教師であることが必要になる。ではどのような対応のできる教師であれば、生徒は相談に行きたいと思うのであろうか。このことを検討した研究に、落合・佐藤・岡本・国本(1995)がある。そこでは、商業科と普通科の生徒を対象として、高校生が進路について「相談して良かったと思う教師の対応」と「相談に行きたいと思う教師の対応」を検討している。しかし、そこでは工業科の生徒と農業科の生徒については検討されていない。文部省の進路指導の手引き(1975)は、高校での進路指導は学校によって異なることを指摘しており、その観点に立てば、それ以外の学科についても検討することが必要になる。高等学校の卒業生数は、普通科が最も多く、その次にほぼ同数で工業科と商業科があり、その後農業科、家庭科、看護科、水産科の専門学科が続いている(文部科学省, 2002)。大学等進学率は普通科が52.5%で最高であり、ここにあげたうちでは農業科が12.2%で最も低い。就職率は水産科が59.8%で最も高く、工業科が52.3%、農業科が48.8%、商業科が41.3%と続く。本研究では、専門学科の中でも10万人以上の卒業生を出している工業科、商業科、農業科を対象として、専門高校での進路に関する教育相談において、生徒が望む教師の対応を明らかにすることを目的とする。そのために同一地域内にある3つの専門高校を取り上げる。さらに、専門高校間での違いについても検討する。また、学年と性別による違いについての検討も加え

る。その際には、商業高校と工業高校は男女の構成比が大きく異なるため、農業高校を中心として分析することにした。

## 方 法

**質問紙の構成** 落合ら(1995)が普通科と商業科の生徒129名に対する予備調査に基づき作成した項目を用いて質問紙調査を行った。落合ら(1995)の項目は、(1)「相談に行きたいと思う教師の対応」、(2)「相談して良かったと思う教師の対応」についてそれぞれ回答を求めるもので各60項目あった。回答には、「あてはまる」～「あてはまらない」の5件法を用いた。(1)と(2)のいずれの場合にも、60項目の回答の直前に、「相談に行きたい」と思う教師が「いる」か「いない」か、「相談して良かった」と思った教師が「いた」か「いなかった」かについて、2件法で回答を求めた。

**調査対象** 九州地方の同一県内の同一地域内の専門高校3校に在籍する1208名(農業高校生は6学科の1-3年生710名、工業高校生は6学科の2年生267名、商業高校生は3学科の2年生231名)であった。なお、農業高校については、全校生徒すべてを調査対象者とした。実際には、1208(M=641, F=567)名中、欠損値のない回答者数は953(M=515, F=438)名であり、これを今回の分析の対象者とした。したがって、実際の内訳は農業高校1年生189(M=87, F=102)名、2年生171(M=78, F=93)名、3年生165(M=87, F=78)名、計525(M=252, F=273)名、工業高校2年生247(M=227, F=20)名、商業高校2年生181(M=36, F=145)名であった。工業高校で女子が少なく、商業高校で男子が少ないのは、それぞれの専門高校における生徒の男女構成比の特性である。

**分析手続き** (1)「相談に行きたいと思う教師の対応」の60項目について分析する際には、直前の質問項目で「相談に行きたい」と思う教師が「いる」と答えた生徒の回答のみを分析に用いた。「相談に行きたい」と思う教師がいないと回答したものは、953名中416名(43.65%)の高校生であった。また、(2)「相談して良かったと思う教師の対応」の60項目について分析する際には、直前の質問項目で「相談して良かった」と思った教師が「いた」と答えた生徒の回答のみを分析に用いた。「相談して良かった」と思う教師がいたと回答したものは、953名中393名(41.24%)の高校生であった。得点の比較を行う際には、各専門高校間の特徴を分析する場合は、2年生の生徒に対象を限定した。学年間・男女

間の特徴を分析する際には、農業高校の生徒に限定して分析を行った。なお、利用した統計パッケージは、Windows版 SAS リリース8.02, STAR-ver. 4.0 (田中, 1992) であった。

## 結果と考察

### 1. 「相談して良かった」教師の対応の分析

a. 専門高校全体での因子分析 高校生が進路について「相談して良かった」と思う教師の相談時の対応を明らかにするために、「相談して良かった」教師に関する60項目について因子分析を行った。重みづけをしない最小自乗法により初期解を求め、最終的に5因子解 (Promax 回転) を最適解として抽出した (寄与率48.84%)。因子パターンは、Table 1に示した。因子の解釈は因子負荷量が.40以上である項目を用い、前回の研究結果 (落合ら, 1995) も参考にしながら行うことにした。なお、落合ら (1995) では、同様の方法で4因子を抽出している。

第1因子は、「自分のことのように考えてくれる先生 (.83)」、「生徒の立場になって考えてくれる先生 (.80)」などの内容から、「親身の対応」の因子と命名した。これは前回の研究の第1因子と同じ解釈である。

第2因子は、「一緒にいると楽しい先生 (.94)」、「話していると楽しい先生 (.91)」などの内容から、「親しみやすさ」の因子と命名した。これも前回の第2因子と同じ解釈である。

第3因子は、「合格するかしないかはっきり言ってくれる先生 (.84)」、「無理なら無理だと正直に伝えてくれる先生 (.62)」などの内容から、「決断の是非の指摘」の因子と命名した。これも前回の第3因子と同じ解釈である。第4因子は、「大学について詳しい先生 (.93)」、「専門学校について詳しい先生 (.88)」、「企業について詳しい先生 (.77)」などの内容から、「巾広い情報の提供」の因子と命名した。これも前回の第4因子と同じ解釈である。

今回新たに得られた第5因子は、前回の第1因子において、負の負荷量を示した4項目が一つの因子として抽出されたものであった。「面倒くさそうにしている先生 (.76)」などからなるこの因子は、「拒否的な対応」と命名した。

続いて、前回の研究と同じく二次因子分析を行った。正の固有値を因子数決定の基準とし、2因子を抽出 (Promax 回転) した。寄与率は65.02%であり、因子パターンは Table 2に示した通りである。二次因子Ⅰは、「F4巾広い情報の提供 (.97)」、「F3決断の是非の指摘 (.64)」などが高い負荷量を示し

た。一方、二次因子Ⅱは、「F5拒否的な対応 (-.71)」、「F1親身の対応 (.63)」などが高い負荷量を示した。前回の二次因子分析結果と同様に一次因子が分かれ、二次因子を構成していた。そこで二次因子Ⅰを、適確さと鋭さ、未知なる現実や社会に関する知識などをあらわしていると解釈し、「鋭く広範囲な展望をもつこと」とした。二次因子Ⅱは、親しみと近づきやすさ、温かさと共感性などをあらわしていると解釈し、「温かく親身の配慮をすること」とした。進路に関する教育相談において、生徒が相談して良かったと思う教師の対応には、「温かく親身の配慮をする」という対応と、「鋭く広範囲な展望をもつ」という対応の両方が見出された。前回普通科と商業科の生徒を対象として見出された結果が、今回農業高校、工業高校、商業高校の3つの専門高校を対象とした場合にも得られることが確認できた。

進路に関する教育相談において、相談して良かったと生徒が思う教師の対応は、大きく2つあることが今回の結果からも示された。「温かく親身な配慮をする」という対応と、「鋭く広範囲な展望をもつ」という対応とである。前者は従来から教育相談において強調されてきたことであり、受容と共感ということばに象徴される相談者の役割と言えるであろう。後者は、もっと直接的で具体的な援助につながることであり、人生の先達としての指導的な役割と言える。進路に関する教育相談においては、生徒にとって未知の世界である大学や職場に関する詳しい知識を与えること、また生徒の決断のよしあしについて適切な指摘をすることなどの指導的な役割も求められているということである。この点で、教師が行う相談活動においては、臨時的なカウンセリングとは別の役割も期待されていることを留意しておくべきであろう。

b. 専門高校間での比較 「相談して良かった」と思う教師の対応の特徴について、農業高校・工業高校・商業高校の3つの専門高校間で比較した (Table 3)。得点は前回の研究にしたがい、標準因子得点を算出して利用した。得られた5つの対応の得点について、専門高校間で1要因の分散分析を行った。多重比較する場合には、すべて TUKEY の HSD 法 (5%水準) を用いた (これ以降、2群間にみられた有意差は不等号 (>) で、有意差のないことは等号 (=) を用いて表現する)。

ところが、専門高校間で有意差がみられたのは、「F1親身の対応」においてのみであった ( $F(2,211) = 4.59, p < .05$ )。多重比較をしたところ ( $Mse = 0.96$ )、商業高校 > 工業高校という結果であった。

Table 1 「相談して良かった」教師の対応に関する項目の因子パターン行列 (Promax 回転後)

項 目	F1	F2	F3	F4	F5	h <sup>2</sup>
KYO5 自分と一緒に悩んでくれる先生	87	03	03	-14	17	61
KYO10 自分のことのように考えてくれる先生	83	-04	05	-05	04	63
COM9 話をきちんと聞いてくれる先生	81	-09	-04	-05	-10	55
KYO11 生徒の立場になって考えてくれる先生	80	-03	00	-04	06	54
COM10 話を聞いてくれる先生	80	-02	-01	-03	-04	60
KYO9 こっちの身になってくれる先生	79	-17	04	-01	-02	50
KYO3 一緒に喜んでくれる先生	79	10	-04	-12	02	60
KYO6 最後まで力になってくれる先生	79	-16	10	-07	-08	56
SHI9 生徒の良いところを見つけることができる先生	73	-10	20	-17	-05	56
COM8 話を最後まで聞いてくれる先生	69	00	01	-05	-14	55
KYO7 真剣に聞いてくれる先生	69	02	-02	-13	-20	54
KYO14 なぐさめてくれる先生	63	11	-12	-03	27	32
KYO19 優しく接してくれる先生	62	22	-18	08	02	52
SHI10 優しくきちんと教えてくれる先生	60	25	-23	16	00	59
KYO15 ほめてくれる先生	60	19	-13	09	29	44
COM19 どんな話でも聞いてくれる先生	59	23	06	-04	-02	63
KYO12 自分のことを思いやってくれる先生	56	-05	-06	06	-24	44
KYO4 自分のために時間を割いてくれる先生	54	-02	22	00	00	47
SHI18 自分の間違いに気づかせてくれる先生	51	-01	27	07	07	53
SHI20 希望を与えてくれる先生	51	18	04	05	05	47
KYO20 自分の意見を押しつけない先生	51	06	08	-01	-06	40
KYO18 頭から決めつけない先生	49	10	05	02	-09	43
SHI19 思いもよらなかった点を指摘してくれる先生	43	03	25	14	21	47
KYO17 意見を尊重してくれる先生	42	04	30	-01	-13	55
COM17 何でも話してくれる先生	42	15	05	15	-06	48
SHI11 自分にあったレベルで話をしてくれる先生	41	22	-08	13	-05	41
COM18 自分の失敗談を話してくれる先生	40	23	03	05	06	37
COM14 何でも相談にのってくれる先生	39	29	-06	23	00	55
COM4 一緒にいると楽しい先生	-11	94	13	-16	-05	76
COM5 話していると楽しい先生	-12	91	14	-15	-09	75
COM6 話しているとうれしい先生	-04	79	10	-07	03	59
COM12 仲がよい先生	11	77	-19	03	-01	62
COM16 自分とよく話す先生	23	69	-15	03	04	64
COM15 気楽にしゃべれる先生	07	66	-08	11	-05	55
COM11 気軽に話せる先生	17	62	-09	-03	-19	62
COM2 冗談を言う先生	-10	59	09	-06	23	26
COM7 話をしたいと思う先生	19	56	01	-08	-02	47
COM3 気さくである先生	-17	49	34	-02	-02	34
COM1 明朗な先生	05	41	23	-03	04	32
COM13 何でも教えてくれる先生	04	41	18	27	02	53
KYO16 むやみに叱らない先生	25	29	-12	06	01	22
SHI14 合格するかしないかははっきり言ってくれる先生	-17	04	84	-11	03	50
SHI16 無理なら無理だと正直に伝えてくれる先生	16	-04	62	-14	17	38
SHI15 正確に判断してくれる先生	18	00	57	04	-02	53
SHI2 頭の回転が速い先生	04	07	40	24	-01	41
SHI5 情報を集めることがうまい先生	14	-12	39	36	01	48
SHI17 ちゃんとしたアドバイスをくれる先生	28	11	36	-12	-08	40
SHI1 生徒の言いたいことを聞き出すことがうまい先生	10	15	34	10	05	32
SHI13 わかりやすく説明してくれる先生	23	04	30	20	-12	48
SHI4 話がうまい先生	07	17	27	25	-01	38
SHI6 大学について詳しい先生	-08	-05	-13	93	-01	65
SHI7 専門学校について詳しい先生	-13	-06	-11	88	-04	56
SHI8 企業について詳しい先生	-09	-10	06	77	10	52
SHI12 何でも知っている先生	06	01	24	48	-01	48
SHI3 将来の見通しを立てることができる先生	18	-09	25	34	-04	38
KYO8 面倒くさそうにしている先生	02	03	08	-04	76	54
KYO13 冷たい先生	08	-07	06	01	73	51
KYO2 いやそうな顔をする先生	-08	01	07	-07	59	37
COM20 話をちゃんと聞いてくれない先生	-06	07	00	16	43	20
KYO1 秘密を守ることができる先生	22	01	15	02	-21	23
因子間相関行列	F1	F2	F3	F4	F5	
	F2	72				
	F3	64	47			
	F4	56	46	55		
	F5	-43	-37	-23	-09	

(小数点省略)

商業高校の生徒は、工業高校の生徒に比べると、先生が相談中に「親身の対応」をしてくれたときに、相談に行っても良かったと思うことが多いと言えよう。

前回の研究では、「決断の是非の指摘」と「幅広い情報の提供」の2つで、商業科の生徒の得点が普通科の生徒の得点よりも高いという結果が得られていた。しかし、今回、専門高校間で比較した場合には、これら2つの対応に関して差は見られなかった。

c. 農業高校における学年及び性別間での比較「相談して良かった」と思う教師の対応の特徴について、農業高校の学年及び性別間で比較した(Table 4)。得られた5つの対応の得点について、学年×性別の2要因分散分析を行った。交互作用が有意になることはなく、学年間に有意差が見られたのは「F1親身の対応」( $F(2, 244) = 17.87, p < .001: 1年 > 2年 > 3年$  ( $Mse = 0.75$ )), 「F2親しみやすさ」( $F(2, 244) = 4.65, p < .05: 1年 > 3年$  ( $Mse = 0.84$ )), 「F3決断の是非の指摘」( $F(2, 244) = 8.58, p < .001: 1年 > 3年$  ( $Mse = 0.69$ )), 「F5

拒否的な対応」( $F(2, 244) = 10.51, p < .001: 3年 > 2年 = 1年$  ( $Mse = 0.67$ ))であった。性別間に有意差が見られたのは、「F2親しみやすさ」( $F(1, 244) = 4.85, p < .05: 女子 > 男子$ ), 「F5拒否的な対応」( $F(1, 244) = 20.98, p < .001: 男子 > 女子$ )であった。前回の研究では、「親身の対応」, 「親しみやすさ」, 「決断の是非の指摘」において、1年生が3年生よりも得点が高かった。今回の1年生が上級生に比べて得点が高くなるという結果は、前回の研究と合致する。1年生は上級生に比べて、

Table 2 「相談して良かった」教師の対応に関する項目の2次因子パターン行列 (Promax 回転後)

	二次因子Ⅰ	二次因子Ⅱ	$h^2$
F4 幅広い情報の提供	97	-21	75
F3 決断の是非の指摘	64	18	58
F5 拒否的な対応	18	-71	38
F1 親身の対応	45	63	93
F2 親しみやすさ	31	55	61

(因子間相関は.60, 小数点省略)

Table 3 「相談して良かった」教師の対応の専門高校間での比較

	農業高校	工業高校	商業高校
F1 親身の対応	-0.04(0.84)	-0.15(1.15)	0.33(0.91)
F2 親しみやすさ	-0.13(0.99)	0.00(1.10)	0.16(0.96)
F3 決断の是非の指摘	-0.05(0.86)	-0.05(1.06)	0.19(1.05)
F4 幅広い情報の提供	-0.03(0.92)	0.00(1.01)	0.18(1.06)
F5 拒否的な対応	-0.08(0.82)	0.13(1.00)	-0.16(0.85)

得点は標準因子得点の平均値(SD)

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

Table 4 「相談して良かった」教師の対応の学年及び性別間での比較

		1年生	2年生	3年生	
F1 親身の対応	男子	0.25(0.65)	-0.25(0.91)	-0.50(0.95)	1年 > 2年 > 3年***
	女子	0.42(0.78)	0.10(0.77)	-0.39(1.06)	
F2 親しみやすさ	男子	0.07(0.75)	-0.36(1.09)	-0.33(0.96)	1年 > 3年*
	女子	0.28(0.85)	0.01(0.91)	-0.11(0.95)	女子 > 男子*
F3 決断の是非の指摘	男子	0.24(0.64)	-0.07(0.89)	-0.27(0.79)	1年 > 3年***
	女子	0.22(0.78)	-0.03(0.86)	-0.31(0.98)	
F4 幅広い情報の提供	男子	0.12(0.86)	0.05(0.84)	-0.12(0.82)	
	女子	-0.09(0.90)	-0.08(0.98)	-0.08(0.92)	
F5 拒否的な対応	男子	0.06(0.93)	0.38(0.86)	0.33(0.91)	3年 > 2年 = 1年***
	女子	-0.45(0.55)	-0.38(0.64)	0.22(0.97)	男子 > 女子***

得点は標準因子得点の平均値(SD)

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

先生が相談中に「拒否的な対応ではなく」「親身の対応」をしてくれ、「親しみやすさ」を感じさせ、「決断の是非の指摘」をしてくれたときに、相談に行っても良かったと思うことが多いということになる。

## 2. 「相談に行きたい」教師の対応の分析

a. 専門高校全体での因子分析 高校生が進路について「相談に行きたい」と思う教師の相談時の対応を明らかにするために、「相談に行きたい」教師に関する60項目についても因子分析を行った。前回の結果と同じく3因子が抽出された（寄与率35.59%）。因子パターンは、Table 5に示した。因子負荷量が.40以上である項目を用いて因子の解釈を行った。

第1因子は、「話していると楽しい先生 (.90)」、「一緒にいると楽しい先生 (.86)」などの結果から、「F1親しみやすさ」の因子と命名した。これは、前回の研究での第1因子と同じ解釈である。第2因子は、「面倒くさそうにしている先生 (-.87)」、「話をきちんと聞いてくれる先生 (.71)」などの結果から、「親身の対応」の因子と命名した。これも前回の研究での第2因子と同じ解釈である。第3因子は、「情報を集めることがうまい先生 (.76)」、「正確に判断してくれる先生 (.61)」などの結果から、「判断に役立つ情報の提供」の因子と命名した。これも前回の研究での第3因子と同じ解釈である。

b. 専門高校間での比較 「相談に行きたい」と思う教師の対応の特徴について、農業高校・工業高校・商業高校の3つの専門高校間で比較した (Table 6)。得られた3つの対応の得点について、専門高校間で1要因の分散分析を行った。しかし、専門高校間の有意差は皆無であった。前回の分析では、「判断に役立つ情報の提供」については、商業科が普通科よりも得点が高かったが、今回は専門高校間に差が無いということが示された。

c. 農業高校における学年及び性別間での比較 「相談に行きたい」と思う教師の対応の特徴について、農業高校の学年及び性別間で比較した (Table 7)。得られた3つの対応の得点について、学年×性別の2要因分散分析を行った。交互作用が有意になることはなく、学年間に有意差が見られたのは「F2親身の対応」( $F(2, 254) = 5.85, p < .01$ : 1年 > 3年 ( $Mse = 0.93$ )) のみであった。性別間に有意差が見られたのは、「F1親しみやすさ」( $F(1, 254) = 8.78, p < .01$ : 女子 > 男子)、「F2親身の対応」( $F(1, 254) = 10.39, p < .01$ : 女子 > 男子)

であった。前回の研究では、3つの対応のすべてで、1年生が3年生より得点が高いという結果であった。今回は「親身の対応」得点だけではあるが、やはり1年生が3年生より高いという結果であった。1年生は3年生に比べて、「親身の対応」をしてくれる先生に対して、相談に行きたいと思うことが多いと言えよう。

## 3. 「相談して良かった」及び「相談に行きたい」教師がいると答えた生徒の特徴

a. 「相談して良かった」教師がいた生徒の割合 「相談して良かった」教師がいたと回答した生徒の割合を専門高校ごとにみたものが Table 8である。しかし、専門高校間で差は見られなかった。学年別の結果についても、男女ごとに比較してみたが、差は見られなかった (Table 9)。

b. 「相談に行きたい」教師がいる生徒の割合 「相談に行きたい」教師がいると回答した生徒の割合を学校ごとにみたものが Table 10である。しかし、専門高校間で差は見られなかった。相談に行きたい教師がいるという回答は、30%台半ばでほぼ一定であった。学年別の結果について、男女ごとに比較してみた場合には、差が見られた (Table 11)。男子でも女子でも、3年生になると相談に行きたい教師がいるという回答が増加していた。卒業年次になると、進路の問題に否応なく直面するため、相談に行きたい教師がいる生徒が増えると考えられる。しかし、3年生は進路の問題を考えるというよりも、進路の問題に答えを出す時期であろう。そう考えると、2年次などもう少し早い段階で相談に行きたい教師を生徒が見つけられるようにすることが、進路についてよく考えさせ、適切な進路を選択していくためには望ましいと考えられる。

c. 「相談に行きたい」教師がいる生徒の特徴 普通科の高校に比べると、専門高校の場合には、進学という進路の選択率が低い場合が多く、進学に関する必要な情報があまり身近ではない可能性がある。また、就職は高校生にとって未知の部分が多く、生徒自身だけで考えることには自ずと限界がある。そのため、専門高校での進路に関する教育相談の第一歩は、「相談に行きたい」と生徒に思わせることであろう。そうでなければ、教師の側が進路に関する教育相談を行う体制を作っても、利用されずに終わる可能性もある。現在「相談に行きたい」という希望と、これまでに「相談して良かった」という経験との関連を分析するために、「相談に行きたい」と思う教師の有無と「相談して良かった」と思う教師の有無の関連を分析した (Table 12)。その

Table 5 「相談に行きたい」教師の対応に関する項目の因子パターン行列 (Promax 回転後)

項 目	F1	F2	F3	h <sup>2</sup>
COM5 話していると楽しい先生	90	-08	-19	59
COM4 一緒にいると楽しい先生	86	-04	-17	58
COM12 仲がよい先生	84	-14	-05	53
COM15 気楽にしゃべれる先生	73	04	-10	50
COM11 気軽に話せる先生	72	10	-14	53
COM16 自分とよく話す先生	71	-06	01	46
COM6 話しているとうれしい先生	68	-02	-08	38
COM2 冗談を言う先生	60	-47	09	20
COM7 話をしたいと思う先生	60	12	-15	37
KYO19 優しく接してくれる先生	58	09	-03	40
KYO15 ほめてくれる先生	55	-14	05	24
COM1 明朗な先生	51	-09	-11	17
KYO16 むやみに叱らない先生	49	-05	00	20
KYO14 なぐさめてくれる先生	47	-10	11	22
SHI11 自分にあったレベルで話をしてくれる先生	44	09	12	35
COM17 何でも話してくれる先生	43	11	20	43
KYO3 一緒に喜んでくれる先生	41	21	08	39
COM18 自分の失敗談を話してくれる先生	40	-08	23	25
COM3 気さくである先生	39	05	-03	16
COM19 どんな話でも聞いてくれる先生	36	36	07	51
SHI10 優しくきちんと教えてくれる先生	36	35	09	51
KYO8 面倒くさそうにしている先生	33	-87	19	34
KYO13 冷たい先生	07	-79	34	32
COM8 話を最後まで聞いてくれる先生	-09	74	-01	45
COM9 話をきちんと聞いてくれる先生	10	71	-07	54
KYO7 真剣に聞いてくれる先生	-05	71	07	53
KYO6 最後まで力になってくれる先生	-06	63	15	48
COM10 話を聞いてくれる先生	-14	61	-05	45
SHI17 ちゃんとしたアドバイスをくれる先生	-10	59	21	46
COM20 話をちゃんと聞いてくれない先生	11	-56	17	16
KYO2 いやそうな顔をする先生	08	-55	22	15
KYO12 自分のことを思いやってくれる先生	12	54	00	40
KYO9 こっちの身になってくれる先生	08	49	06	36
KYO10 自分のことのように考えてくれる先生	14	46	17	48
KYO5 自分と一緒に悩んでくれる先生	18	44	16	50
KYO18 頭から決めつけない先生	24	39	-02	33
SHI9 生徒の良いところを見つけることができる先生	23	35	09	36
KYO11 生徒の立場になって考えてくれる先生	24	33	21	48
COM14 何でも相談にのってくれる先生	21	28	19	36
KYO20 自分の意見を押しつけない先生	15	27	17	27
KYO1 秘密を守ることができる先生	15	27	01	16
SHI5 情報を集めることがうまい先生	-19	02	76	47
SHI8 企業について詳しい先生	01	-37	72	29
SHI6 大学について詳しい先生	01	-38	71	28
SHI7 専門学校について詳しい先生	-07	-31	70	26
SHI12 何でも知っている先生	-13	01	69	40
SHI15 正確に判断してくれる先生	-11	13	61	41
SHI3 将来の見通しを立てることができる先生	-09	10	52	30
SHI14 合格するかしないかははっきり言ってくれる先生	-08	-05	50	19
SHI2 頭の回転が速い先生	01	-07	46	17
SHI19 思いもよらなかった点を指摘してくれる先生	-07	19	44	30
SHI18 自分の間違いに気づかせてくれる先生	08	26	41	46
SHI13 わかりやすく説明してくれる先生	-01	30	38	38
COM13 何でも教えてくれる先生	35	-02	37	38
KYO17 意見を尊重してくれる先生	19	17	36	40
SHI1 生徒の言いたいことを聞き出すことがうまい先生	08	04	35	19
KYO4 自分のために時間を割いてくれる先生	12	23	30	33
SHI4 話がうまい先生	20	-10	29	13
SHI20 希望を与えてくれる先生	18	22	27	34
SHI16 無理なら無理だと正直に伝えてくれる先生	-07	15	25	11
因子間相関行列	F1	F2	F3	
F1				
F2	70			
F3	56	69		

(小数点省略)

Table 6 「相談に行きたい」教師の対応の専門高校間での比較

	農業高校	工業高校	商業高校
F1 親しみやすさ	-0.08(1.07)	0.01(0.89)	0.26(0.94)
F2 親身の対応	0.03(0.97)	0.00(0.94)	0.28(0.84)
F3 判断に役立つ情報の提供	0.03(0.99)	0.02(0.90)	0.29(1.00)

得点は標準因子得点の平均値 (SD)

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ 

Table 7 「相談に行きたい」教師の対応の学年及び性別間での比較

		1年生	2年生	3年生
F1 親しみやすさ	男子	-0.18(0.81)	-0.01(1.00)	-0.42(1.00)
	女子	0.36(0.74)	-0.14(1.15)	0.07(1.05)
F2 親身の対応	男子	-0.04(0.89)	-0.21(1.07)	-0.44(0.99)
	女子	0.40(0.73)	0.25(0.82)	-0.13(1.12)
F3 判断に役立つ情報の提供	男子	-0.11(0.81)	0.22(1.08)	-0.31(0.98)
	女子	0.19(0.76)	-0.17(0.88)	-0.11(1.02)

得点は標準因子得点の平均値 (SD)

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ 

Table 8 専門高校ごとにみた「相談して良かった」教師がいたと回答した生徒の割合

	農業高校	工業高校	商業高校
いた	71( 41.5)	76( 30.8)	67( 37.0)
いなかった	100( 58.5)	171( 69.2)	114( 63.0)
計	171(100.0)	247(100.0)	181(100.0)

 $\chi^2_{(2)}=5.28$ ,  $ns$ 

数値は人数 (%)

Table 10 専門高校ごとにみた「相談に行きたい」教師がいたと回答した生徒の割合

	農業高校	工業高校	商業高校
いる	61( 35.7)	88( 35.6)	68( 37.6)
いない	110( 64.3)	159( 64.4)	113( 62.4)
計	171(100.0)	247(100.0)	181(100.0)

 $\chi^2_{(2)}=0.20$ ,  $ns$ 

数値は人数 (%)

Table 9 男女別学年別にみた「相談して良かった」教師がいたと回答した生徒の割合

	1年生	2年生	3年生
男子			
いた	33( 37.9)	28( 35.9)	42( 48.3)
いなかった	54( 62.1)	50( 64.1)	45( 51.7)
計	87(100.0)	78(100.0)	87(100.0)

女子

いた	56( 54.9)	43( 46.2)	48( 61.5)
いなかった	46( 45.1)	50( 53.8)	30( 38.5)
計	102(100.0)	93(100.0)	78(100.0)

男子： $\chi^2_{(2)}=3.08$ ,  $ns$ 女子： $\chi^2_{(2)}=4.07$ ,  $ns$ 

数値は人数 (%)

Table 11 男女別学年別にみた「相談に行きたい」教師がいたと回答した生徒の割合

	1年生	2年生	3年生
男子			
いる	38( 43.7)	30( 38.5)	61( 70.1)
		-2.71**	4.36**
いない	49( 56.3)	48( 61.5)	26( 29.9)
		2.71**	-4.36**
計	87(100.0)	78(100.0)	87(100.0)

女子

いる	39( 38.2)	31( 33.3)	61( 78.2)
	-2.49*	-3.48**	6.32**
いない	63( 61.8)	62( 66.7)	17( 21.8)
	2.49*	3.48**	-6.32**
計	102(100.0)	93(100.0)	78(100.0)

男子： $\chi^2_{(2)}=19.49$ ,  $p < .01$ 女子： $\chi^2_{(2)}=40.42$ ,  $p < .01$ 

上段は人数(%), 下段は調整された残差.

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ .

残差の+値は期待度数以上, -値は期待度数以下であることを示す.

結果、「相談して良かった」教師がいたことは、「相談に行きたい」教師がいることに関連していることが示された。ただし、経験が無く希望も無いという生徒の割合が41.9%で比率としては最も高かった。

さらに、現在「相談に行きたい」教師がいると回答した416名のうち、行って良かった経験がある255名（「いた」と回答したもの）と行って良かった経験の無い161名（「いなかった」と回答したもの）の間で、「相談に行きたい」教師の3つの対応の得点を比較してみた。その結果、有意差は得られなかったが、「F2親身の対応」( $t(414)=1.72$ )と「F3判断に役立つ情報の提供」( $t(414)=1.96$ )においては、有意傾向( $p<.10$ )を見出すことができた。有意差はないものの、3つの得点すべてで、行って良かった経験がある者の方が、無い者に比べて得点は上になっていた。

以上のことより、過去に「相談して良かった」と思える教師と出会ったことのある生徒は、現在「相談に行きたい」教師をより高く評価していることが示唆される。そのため、実際にその生徒がその教師のもとに相談に行く可能性も高くなると考えられる。したがって、専門高校において進路に関する教育相談を実現し、生徒を援助するためには、できれば3年生になる以前に、「相談して良かった」と思えるような経験をさせることが良いのではないかと考えられた。そのためには、「相談して良かった」教師の対応の分析から得られた相談時の対応を念頭に置くことが役に立つであろう。すなわち、専門高校において進路についての教育相談をする際、教師は、温かく親身な相談をするということである。そしてもう一つは、教師自身が広い知識と情報を持ち、生徒がいま迷っている人生の選択や決断の意味やその決断の是非を指摘するような対応をすることである。

## 引用文献

- 小杉礼子 2003 フリーター・若年無業問題への対応を考える ビジネス・レーバー・トレンド (Business Labor Trend) 11月号 Pp.4-9. 労働政策研究・研修機構
- 文部省 1975 中学校・高等学校進路指導の手引—高等学校ホームルーム担任編— 日本職業指導協会
- 文部科学省 2002 平成14年度学校基本調査報告書(初等中等教育機関専修学校・各種学校) 財務省印刷局
- 野尻丈七・森 光雄 1969 進路指導の本質 理想社
- 落合良行・佐藤有耕・岡本政博・国本勝正 1995 進路相談において生徒に望まれる教師の対応 教育心理学研究 43, 445-454.
- 田中 敏 1992 パソコン用統計分析プログラム STAR version4.0 (田中 敏・山際勇一郎著) 新訂ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法 教育出版
- 佃 直毅 1988 進路指導をどう考えるか (藤本喜八・中西信男・竹内登規夫編) 進路指導を学ぶ 有斐閣選書 Pp.1-26.
- 浦上昌則 2003 高校生の進路選択 (後藤宗理・大野木裕明編集) 現代のエスプリ No.427 フリーター Pp.163-176. 至文堂
- 安田 雪 2003 働きたいのに…高校生就職難の社会構造 勁草書房

(受稿 4月15日：受理 5月19日)

Table 12 「相談に行きたい」教師の有無と「相談して良かった」教師の有無との関連

		「相談に行きたい」教師の有無	
		いる	いない
「相談して良かった」教師の有無	いた	255 (26.7) 11.07**	138 (14.5) -11.07**
	いなかった	161 (16.9) -11.07**	399 (41.9) 11.07**

$$\chi^2_{(1)}=122.60, p<.01$$

上段は人数(%), 下段は調整された残差.

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ .

残差の+値は期待度数以上、-値は期待度数以下であることを示す。